解説・報告

米国獣医神経学専門医の資格取得

金園晨一[†]（埼玉動物医療センター）

1 はじめに

2001年頃に漠然と米国での専門的教育に憧れを抱き始めた一学生は，右も左もわからないまま周囲の方々の温かな支えのおかげで2007年に米国に渡り2013年8月に念願の獣医神経科医としての第一歩を踏み出すことができた．専門的医療のスタートラインに立ったばかりの私が何かを書くというのは大変おこがましいが，今までお世話になった方々に感謝の意を込めて個人的な経験を少しばかり紹介させていただきたい．少しでも皆様のお役に立つことができれば幸いである．

2 北米の獣医専門医制度

ACVIM（米国獣医内科学会）は1972年に設立され，2013年現在で小動物一般内科医1,195名，腫瘍内科322名，心臓病科233名，神経科238名が登録されている．詳細な各専門医統括学会の成り立ちや規模は簡単に調べることができるので皆様にお任せしたい．このようなシステムの本当の凄さは，内部及び外部から見て質の高い専門医制度を確立させる，という強い意志を持ち続け，それを実現させた先人，そして現在運営に当たっている多くの専門医達の努力の賜であろう．専門的医療の実践には施設や資金なども重要な要素であるが，最も重要なのは実践する専門家集団の質，そしてそれを支える多くのスタッフの質が何よりも不可欠である．また，米国の大学病院が先鋭的治療ばかりを行っているという印象が先行しがちであるが，一般的な疾患に対する理解の深さ，医療モラル，専門分野以外を含めたバックグラウンドの広さ，そしてそれらを基にした現実的な診断・治療の選択が専門家の凄みであろう．このような素晴らしいシステムを作り上げるには相当な時間と膨大な労力が必要だろうと思われ，このようなシステムを作り上げることを想像しただけで目眩がする．

3 大学生：初めて獣医師を志した

私が初めて獣医師になりたいと思ったのは，北海道大学農学部畜産科学科の頃であった．それまで，獣医師という職業について考えたことは皆無であった．むしろ白状すると，高校生の頃は血が苦手（だと思っていた）な自分にとって命あるものを扱う大きな責任がつきまとう獣医師という職業は全く魅力的ではなかった．大学ではもっぱら部活動に明け暮れ，授業に出るのは出欠確認の時のみ，という典型的なダメ学生だった．何となく専攻したかった学科にも成績が悪くて行けなかったため，友達が多くて楽しそうな畜産学科への専攻を決めた．獣医師になりたいと思い始めた頃の夢は産業動物医であり，北海道大学卒業と同時に岩手大学へ学士編入学を果たした際も入試の面接でそのような話をした．それが，入学後に紆余曲折を経て小動物臨床へ進もうと決めたものだから，後に外科研究室でお世話になった原　茂雄先生（当時・岩手大学教授）から「ありゃ？　大動物やりたいんじゃなかったっけ？」と言われて苦笑せざるを得なかったことは今でもよく覚えている．全くもって初志貫徹とはいかなかった．

4 米国へ行きたい…

小動物臨床に心が傾くのと同時に米国で活躍されている方々の噂に強い衝撃を受け，将来的に米国で専門的教育を受けたい，と，「獣医師になりたい」と思った時と同じように極めていい加減に思い始めた．当時はインターネットなども現在ほど広く普及していなかったので，アメリカの専門医制度に関する雑誌の記事を片っ端からコピーして読み漁った．外科学研究室で臨床の仕事に心を鷲づかみにされ，アメリカ行きは漠然としつつも自分の心の中で次第に膨らんでいった．私は人生の数々の進路選択の中で，自分では極めて自然だと思っているが周囲からは異質だと思われる選択を重ねており，米国への留学という進路も周囲からは非常に異質なものであったろうと回想される．この頃までには両親は私の異質な選択にすっかり慣れて（諦めて）いたことはとても幸運だった．

大学卒業が近づき就職活動をする際にも，その後の渡米を見据えて新宿区の相川動物医療センターに新卒採用してほしいと，今思えばかなり無茶なお願いをしてし

† 連絡責任者：金園晨一（埼玉動物医療センター）
〒358-0002　入間市東町7-2-7　☎04-2966-1031　E-mail : kanazonos@cc.wakwak.com

まった．卒業前から実習のため数度上京し，時には飲みに連れて行っていただいた．

5 渡　　米 ?

就職時には，勤務医を3年間で終えて渡米しようと心に決めていた．が，仕事を始めると日々の仕事に追われて自分の足りない部分ばかりが目につき，元来出不精な性格も災いして，具体的には一歩も前進していなかった．自分の心の中であまりにも漠然としている進路を誰かに否定されると崩れ去るのではないかという不安が勝っていたのかもしれない．とは言え，開業するという選択肢は自分に全く向かない上に日本でずっと勤務医として過ごすことは経済的に厳しいと感じており，臨床3年目の春頃から真剣に転職を考え始めた．岩手大学在学時に社会人サッカーチームで偶然一緒だった，外資系の製薬会社で世界各所を飛び回ってご活躍の梶原啓太さんに長電話で転職相談を持ちかけ，とても親身に話を聞いていただいた．アメリカ大学院留学経験もあり豊かな国際感覚に基づいた彼の親切なアドバイスには，感謝しきれない．そうこうしているうちに2006年も後半に入り，いよいよ悩んでいた私への，奥田和弘先生（現 二俣川動物病院院長）の「前のめりで倒れてもいいんじゃない？とりあえずアメリカに行ってみれば？」という一言で私の心は一気に留学へと傾いた．一時帰国されていた浅川誠先生（現 ノースカロライナ州立大学准教授・米国獣医麻酔専門医）や林　慶先生（現 コーネル大学准教授・小動物外科専門医）に初めてお会いして強烈な眩しさを感じながら，春に退職という迫り来る期限も併せて，全く具体的にならなかった私の米国留学は一気に動き出した．

脳神経系の機能について漠然とした興味があったこと，様々な神経疾患症例に遭遇するチャンスがあった環境もあいまって，いつしか私は自然に神経科医になりたいと思うようになっていた．大学院留学という選択肢は自分にはなかった．理由を思い返してみると，これまた漠然としていた気がする．大学院に費やす学費や時間などの要素はもちろんだが，「大学院は研究が仕事であり臨床からほぼ完全に離れる．できるだけ臨床に留まった方が良いのでは？」という相川先生のアドバイスも大きかった．そこでノースカロライナ州立大学のDr. Karen Muñanaにコンタクトを取っていただいた．同大学は外国人獣医師向け見学プログラムが確立されており，当時は90日間まで50ドルで見学可能であり魅力的だった．他大学は1週間の見学につき200～400ドルの費用がかかる所が多く，とても無理な話であった．

6 ミズーリ大学に流れ着くまで

ノースカロライナ州立大学見学の初日は今でも忘れられない．何とか神経科の部屋へ辿り着いたものの固まった笑顔でガチガチに緊張していた．そこへ，神経科ローテーション初日だった，当時小動物外科レジデント1年目の三井先生（現 在米 小動物外科専門医）がひょっこり現れた．あの時の後光の差し方は半端ではなかった．以来，彼女が神経科に居た2週間は朝から晩まで本当にお世話になり，当初の苦労を9割方助けていただいた．英語もあちらのマナーや風習もわからず緊張しっぱなしだったのには変わりなかったが，既に麻酔科のファカルティーとして勤務されていた浅川　誠先生，奥様で病理科レジデントを始められた浅川　翠先生（現 ノースカロライナ州立大学講師・米国獣医病理専門医），放射線腫瘍科レジデントの塩満啓二郎先生（現 ルイジアナ州立大学准教授・米国獣医放射線学専門医）には本当にお世話になりっぱなしだった．塩満先生にはいつも悩みの相談に乗っていただき，無料でコーヒーやお茶を飲める場所，ダウンタウンの美味しいハンバーガー屋さんを教えてくれた浅川　誠先生とはちょくちょく無料コーヒー飲み場でお会いすることができてとても嬉しかった．浅川ご夫妻のご自宅で夕飯をご馳走になり，ほうれん草のおひたしに涙が出そうだった．

肝心の神経科見学は衝撃的だった．時間をかけてじっくりと動物を観察すること，十分な病歴を取って系統立てて思考することの素晴らしさ，それでも全てが解るわけではない臨床の奥深さ，そして診断治療にあたる論理的思考やユーモアを交えながらの診察室でのトークなど，全てが圧倒的だった．世界的に著名な教官陣はもちろんだが，当時レジデント2年目だったDr. Ed MacKillopの頭脳明晰さとユーモアには完全に脱帽だった．が，そのような楽しさと同時に精神的には難しい一面もあった．専門医への憧れは一層強くなったものの，あまりにも違う獣医療のレベルと言語の壁が高くそびえ立ち，今まで日本で忙しくしていたつもりだった自分の社会的存在価値など跡形もなく消えてしまった気がした．

ノースカロライナ州立大学での見学研修を終えた後は，1カ月間の一時帰国を経て，トロント中心部にあるVeterinary Emergency Centreで神経科Externとしてお世話になった．この時の出会いがなければ現在の自分はないだろう．この大きな2次診療専門の民間病院にとって，私は初めての外国人Externだった，ルーマニアからカナダに移住して，当時ECFVGプログラムの準備を進めながらVTとして働いていたDr. Dragos Tudoseと毎日くだらないことばかりよく話した．ここでも無料コーヒーを毎日いただいた．Dr. Debbie Jamesには人前で披露できないような英語を教わり，Dr. Susan Cochraneは何も知らない東洋人を温かく迎えてくださり，何から何まで本当に親身になって相談に乗っていただいた．彼らの強い勧めで，私は無謀にも小動物インターンシップに応募することになった．結果的

には惨めなものであったが，この体験は自分のその後に大きな糧となった．インターンシップは全米の優秀な学生が競うように応募する1年間のプログラムで，インターンシップ修了証はほとんどのレジデント応募に必要となる．ポッと出の外国人にはあまりにも高いハードルであった．

トロントの民間病院はとても居心地が良かったが，勉強をする環境という点では大学の方が有利なのでは，という気持ちからトロントを離れることを決めた．北米各地の大学の神経科教官にメールを書きまくり，たまたまミズーリ大学のDr. O'Brienから快いお返事をいただいた．この頃の私は，自分の夢を考える精神的な余裕はなく，合法的に北米に留まることと日々の生活のことで心は一杯だった．ミズーリ州はアメリカの真ん中だからトロントより暖かいだろう，という勝手な思い込みだけを胸に11月末にミズーリ州コロンビアに向かった．この勝手な思い込みは，全くの思い違いであったのだが．

7　ミズーリ大学での見学の日々

ミズーリ大学での日々は，Dr. Dennis O'BrienとDr. Joan Coates，2人の教官に対する信頼感に包まれたものだった（図1）．不思議と，彼らの下で努力して駄目なら仕方ないと自然に感じていた．寒い冬の中，経済的にもジリ貧で車もない私を，親切な学生達，レジデント，教官達が入れ替わり助けてくださった．当時眼科レジデントをされていた太田(黒木)珠里先生（米国眼科専門医），病理専門医として勤務されていた黒木圭一先生（ミズーリ大学准教授・米国獣医病理専門医）の存在はこの上なく心強く，今でもお世話になりっぱなしである．帰国が迫った頃に前述のインターンシップ応募の結果が出て落ち込んでいた私に，暗いMRI操作室でDr. Coatesから短い話を受けた．これが私のその後の道標となった．「インターンシップはとても優秀なアメリカ人でも本当に難しいので，どれだけ優秀で経験があってもあなたのように外国でしか経験のない獣医師には非現実的でしょう．ミズーリ州は大学内でもアメリカの獣医師免許がないと雇用できない（注：ミズーリ州とテキサス州は，州の法律によって大学付属病院に勤務する場合でも通常の北米獣医師免許が必要となり，他の州のような外人向けのacademic licenseは発行されない）．周囲を納得させるためにアメリカの獣医師免許を取りなさい．免許を取るには時間がかかるでしょうから，その間ここで研究の仕事をしながら勉強しなさい．そしてインターンやレジデントに応募してみなさい」．こうしてDr. Coatesは私のアメリカでの母親とも言うべき存在になった．

米国への腰を据えた引っ越しは素晴らしいオファーであるものの一大事だった．黒木ご夫妻，全く違う分野で研究者としていらっしゃった近藤さんご夫妻，田仲さんご夫妻などに相談し，数日間じっくりと考えた末にDr. Coatesからの話を受けることとした．

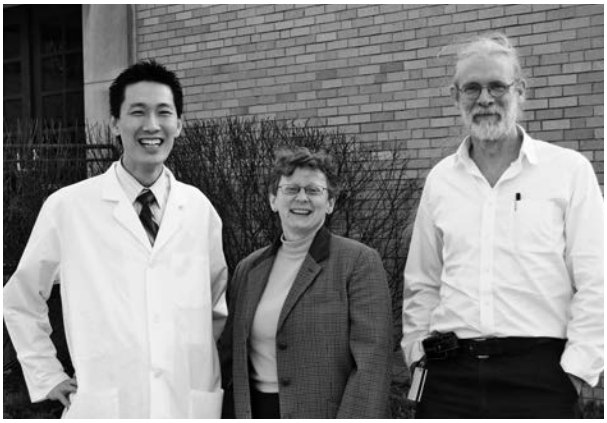

図1　ビジターの頃に撮影した，唯一のまともな？　恩師2人との写真
中央：Dr. Joan Coates，右：Dr. Dennis O'Brien

8　ポスドクフェローとしての生活とアメリカ獣医師免許取得

この2年間は色々な意味で大変苦労し，本当に辛かった．ミズーリ州コロンビアは小さな大学町だが，治安が良くアメリカの大学町としては比較的文化度が高い．医療面に力を入れていることもあり，全米で住みよい町の第1位にランキングされたこともある．そんな住みよい環境での新たな一歩だったが，先の見通しが全くなく，なるべく先を見ずに日々の生活をやり過ごすので精一杯だった．外国人がアメリカの獣医師免許を取るためにはEducational Certificate of Foreign Veterinary Graduates（ECFVG）というプログラムをパスする必要があるが，最初の難関がTOEFLだった．speakingだけが合格点の26/30に満たなかった．決して安くないTOEFLを繰り返し受ければ受けるほどspeakingの点数が落ちたのには，本当に閉口した．家でブツブツと下手くそな英語のスピーチを練習し続ける様子を毎日見せられた妻には申し訳ない気持ちで一杯だった．結局，TOEFLを合格するのに3～4カ月間程度かかったと記憶している．

そんな辛い日々ではあったが，常に周囲の温かい人達には恵まれていた．Dr. O'BrienとDr. Coatesは見ず知らずの私を家族の一員として迎えてくれ，度重なる相談に病院，家，レストラン，と様々な場所で根気強く乗ってくれた．レジデント達や神経科テクニシャンのStephanie Gilliamも私の面倒を事細かに見てくれた．比較神経病学研究室ではDr. Coatesの下でダックスフントの神経セロイドリポフスチノーシス，そして彼女のライフワークである変性性脊髄症の研究に携わった．

その後，研究の仕事をしながら1年半かけてECFVG

の試験をこなしていったわけだが，最後のCPEという実技試験は何があっても二度と受験したくない．私はこれに一発合格しなければレジデントへの道は閉ざされて帰国するしかなく，おまけにECFVG試験費用はDr. O'BrienとDr. Coatesが負担してくださっていた．もし落ちたら早くて半年後の再受験料が5,000ドル，ロトくじでも当たらなければ到底無理な話で，試験前夜から4日間一睡もできなかった．これに比べれば，専門医の試験勉強は落ちても職を失うわけでもなく翌年に受け直せば良いだけだったので精神的には遙かに楽だった．大学に居たおかげで，産業動物や馬などの診察やラウンドに混ぜていただいて非常に多くのことを学ぶ機会をいただけたのは大きな幸運であった．特に馬科動物の診察に関して日本では全く触れる機会がなかった上に独特の馬用語が加わり，皆の会話がまるで宇宙語のようであった．完全に落ちたと思い込み，日本に帰国する心づもりでトボトボとミズーリに帰った．約1カ月後に合格通知が届いた時には到底信じられず，震えた手で結果通知はグシャグシャになった．私のようによっぽどの必要性に迫られた場合，あるいは一生を北米で過ごす計画である場合を除いて，ECFVGはあまり他人には勧められない．

9　マッチングプログラム

毎年秋になるとマッチングプログラム委員会から，翌年7月から始まるレジデント，インターンの募集要項が発表される．インターン・レジデントを募集したい施設がこの委員会にあらかじめ申請し，審査に通れば，募集人数，その施設の規模，年間症例数，使用できる診断機器類，プログラムの詳細，給与，直接的に指導する専門医達の詳細，応募者に必要となる諸条件，連絡先など，募集要項の詳細がマッチングプログラムHPに掲載される．募集する施設は，施設面はもとよりインターン・レジデントを教育できる専門医の人数や専門科など細かく決められた厳しい基準をクリアする必要がある．応募者達は公開された情報を頼りに各施設と連絡を取り，面接へとこぎ着ける．応募には，成績優秀なのは言うまでもなく，専門医達からの強力な推薦状が大切であり，受け入れ側と推薦側は直接連絡して応募者について確認を取る．書類審査，面接など一通りの審査を終了すると，応募者側は自分が応募した施設をランク付けする．一方，施設側も応募者達をランク付けしていく．応募者から見た1位と募集施設から見た1位がマッチするとめでたくマッチング合格，ということになる．

2010年7月からの神経科レジデントプログラムは9つの大学で1名ずつの募集があったが，熟慮の末にノースカロライナ州立大，ミズーリ大，タフツ大，テネシー大，バージニア大，ペンシルバニア大に応募を決めた．5つの民間病院募集枠は，ビザ取得支援などで外国人にはハードルが高いと判断した．面接旅行を終えると各大学をランク付けするわけだが，居心地の良い（すぎる？）ミズーリを出るべきかどうか，非常に悩んだ．北米のインターン・レジデント制度（に限らないが）では，応募者が出身大学に留まることはほとんどない．学んだことを持って外に出て行き，インターン，レジデントと全く別の環境に身を置くことが強く推奨される．大学側も常に外部から人材を積極的に採り続けることで多角的な視野が得られ，様々な点での多様性を受け入れる土壌が育つ．そのような風土の中で自身の立場を客観的に考えるとミズーリから出るべきだという気持ちも強く，面接を通じてとても魅力的な病院を知ることができたこともありかなり悩んだ．最終的には，ギリギリまで悩んだ末に神経科レジデントプログラムの評価が全米でも非常に高く心から尊敬できる教官が居るミズーリ大学を第1位とした．

マッチングの結果が出るまでの間はECFVG準備と研究の仕事で必死だったが，ある日病院の廊下でDr. Coatesから「今日，候補者の選考をしたが，我々はとても良い選択ができた．今年は全員一致で非常に簡単だった」と笑顔で話され，直感的に自分が選ばれたのだと思った（大学側が事前に候補者にこのような情報を漏らしてはいけないのは言うまでもない．後で良い笑い話になった）．

以後，レジデント生活を始めるまでの間，私は一生で最も悩んだだろう．レジデントを受諾するということは夢が叶う一方で3年間全く動きが取れなくなることを意味しており，非常に悩んだ．悩み抜いたまま結果発表を迎え，やはりミズーリ大学にレジデントとして採用が決まった．レジデントを途中で辞職することは周囲への多大な迷惑を考えると何よりも避けたいと考え，選考に漏れた他の候補者の中からなるべく良い人材をミズーリ大神経科が選べるよう，発表当日に神経科教官達を呼び，レジデントとしての採用を断りたい旨をありのまま伝えた．教官3名からの即答は本当に意外なものだった．もし今年新たなレジデントが入らなくても何とかクリニックは回せるので私以外を採用する気はないこと，時間をかけて検討すれば最良の道を選べる可能性があるのであれば数カ月時間をかけて考えてみてほしい，とのことであった．以後悩みつつも様々な準備・整理を行いながらECFVGの最終試験に臨み，4月末頃になってようやくレジデント採用を受諾したいとの旨を伝えた．

10　臨床研修開始

レジデント生活は，とても有意義な時間だった．日々の臨床の中で英語力が飛躍的に伸びた．夜中でも構わずしょっちゅう起こされ，ICUからの電話に半分夢うつつのまま意外なほどキチンと受け答えしている（とイン

ターンから言われた）自分に驚いた．レジデント制度は，レジデント自身のためのトレーニングに主眼が置かれているのは言うまでもないが，その他の義務も数多く課せられている．診察，学生の教育はもちろん，ジャーナルクラブ，ゼミや検討会での発表，研究，地域獣医師からの電話コンサルタントへの対応などが含まれる．

実際の診察治療のほとんどはレジデント主導で行われ，教官は全体の監督をしながら必要な時にのみバックアップをする．この教官達の「出る，出ない」の間合いは絶妙だった．一方，レジデント達は教官達に必要な時に必ず相談をしながら仕事を進めることが義務づけられており，この暗黙の了解を含めた掛け合いがあっという間に巧くなる．筆者が渡米後に体感してとても驚き，レジデントとして勤務するうちにある程度自然に身についた（と信じたい）ことは，医療倫理の大切さである．検査や治療方法を決定する上で「後に外部の専門家や一般の方が振り返っても納得のいく方針」を決定するため，「やりたい盛り」のレジデント達のささやかなエゴが入る余地はない．そもそもほとんどのレジデントは採用される前からこのような考えは持ち合わせないのだが，もしもそのような素振りを見せると，即座に専門医が介入して軌道修正を行う．そして，これを2～3回も繰り返すと警告を受けてあっという間に職を失うこともある．こうして，EBM（Evidence-based medicine）と中立的な立場を常に守ろうとする心構えを持つ者が残る．もちろん，十分なエビデンスが存在しない領域もたくさんあるわけだが，そのような場合には後々のトラブルにならないように専門医の意見が最大限に反映されることが多い．

ACVIM傘下のレジデントは1年ごと（ミズーリ大は半年ごと）にレジデントレビューという教官との面談を受け，パフォーマンスやその後の諸事について様々なアドバイスなどを受ける．総合的なパフォーマンスが悪いとレジデントを継続することができない．たった1年間のインターンはもっと厳しい．幸い私の最後のレジデントレビューは，どうやって私のポンコツのアメ車を売るか，ということが主な議題となり，大爆笑で終わった．

実際の診療では，3年間のレジデント生活の間に成書にある神経系疾患はほとんど全て経験し，院内から，そして電話やメールでの院外コンサルタントなども併せると膨大な種類と数の患者を直接的あるいは間接的に診ることになる．クリニックにいる間はコンサルタント希望や紹介症例についての電話などが1日中鳴り続けるため，仕事用携帯電話のバッテリー消費はとんでもなく速い．夕方までバッテリーが持たないこともザラだった．毎週多くの論文を読み漁ったのだが，本当に大切なのはそれぞれの論文について教官や同僚達とディスカッションを重ねることで様々な視点から論文に対するジャッジメントを行うことなのだと知った．レジデントラウンドという毎週木曜日の1時間はレジデントとして1週間で最も大切な1時間であり，レジデント達は教官からみっちりと質問攻めにあう．レジデントとしての存在価値をかけて準備するため，毎週水曜日は朝方まで寝られなかった．大抵の場合，話が脱線したり全く予想していなかった質問攻めにあったりして朝方までの努力はすぐには報われないのであるが，このような必死の攻防を3年間毎週続けることで自然と専門医としての考え方や知識が身についた気がする．

とても幸運なことにミズーリ大学のレジデントプロジェクトは長年培われた実績を基に非常にバランスの良いものに仕上がっており，質の高さでは定評があった．教官陣は我々レジデントを非常に温かく見守りつつも適切なアドバイスを欠かさなかった．幸いレジデントとして思いがけないほどの評価を周囲からいただき，親友と呼べるレジデントメイト達にも恵まれた（図2）．タイプもバックグラウンドが全く異なる3名の高名な神経科医 達（Drs. Dennis O'Brien, Joan Coates, Fred Wininger）に教育を受けられたのは，神経科医としての礎を築く上でとても幸運であったと思う．また，レジデント中にDr. O'BrienがACVIMから非常に栄誉のあるRobert W. Kirk Award for Professional Excellenceを受賞されたのは心から喜ばしかった．

11　2つの専門医試験

神経科は神経内科・神経外科の両方を担当するが所属先はACVIMであるため，レジデント2年次終了時に一般内科及び生理学の試験を受けなくてはならない．系統だった内科一般の教育内容をとっくに忘れ去っていた私には大変だったが，何とか無事に合格した．試験直後のニューオリンズでは浅川　誠先生らに楽しい席にお誘いいただき，朝まで飲み歩いた．レジデント終了間際の2013年4月から2カ月間は最後の専門医試験のための受験勉強にあてられた．獣医神経科の主立った教科書や過去5年間の論文とそれ以前の主要な論文を全て読み直し，神経病理学，生理学，解剖学，薬理学，放射線学，電気生理学，神経発生学など，神経科疾患に関係する分野の主な教科書や論文を読み漁り，片っ端から覚えた．これら全てが試験範囲であり，基本的に何が出題されても文句は言えない．迫り来る試験に向かってもがいているレジデント達に教官達が不適に放つ“that's fair game”という言葉を何度も耳にしたが，fair gameと言うにはあまりにも広大なものに挑む気分だった．麻布大学の齋藤弥代子先生からいただいたスタッドレスタイヤが入っている「滑らない」御守りを飾った部屋に1日籠もってガリ勉をした．試験勉強中の唯一の気晴らしは午後の日課として決めた，近所のStephens Lake Park

図２　麻酔科医の Dr. John Dodam，そして同期のレジデントメイト達と

でのジョギングだった．ただのジョギングがあれほど楽しかった記憶はこれまでにない．

最終専門医試験は２日間に及ぶ筆記試験だった．合計17時間あまり書いて書いて書きまくった．試験は思った以上に手強く，最初の科目だった神経放射線学でコテンパンにやられ，落ちたことをほぼ確信したが，黒木圭一先生からの“Stay positive”を標語に試験をこなし，３日後の学会発表を行い，失意の中ミズーリに戻る途中デンバーで飛行機の乗り継ぎができずに一晩足止めを食い，追い打ちをかけられた気分だった．とりあえずデンバーの地ビールを楽しんだ．

試験結果がどちらに転んでも楽しいようにと，結果発表は旅行先で迎えることにしたのだが，計画が甘く成田空港に着陸したばかりの機内で結果を確認した．目が回る思いで ACVIM のウェブサイトを開いて結果のページへ．視線が全く定まらない私の視界に自分の番号が飛び込んできた時には，機内泊直後という状況も加わって目が相当チカチカした．一瞬でも目を離すと番号が消えてしまいそうで iPhone の小さな画面を睨み続けていた．横で私の顔を一心にのぞき込んでいた妻に「受かった…」と報告するのが精一杯で，大騒ぎできない早朝の滑走路上で心から安堵した．その時の妻の涙に今まで散々付き合わせた苦労が詰まっている気がした．

帰国後，2013年８月からはレジデント採用前より継続的な温かい支援をいただいていた入間市の埼玉動物医療センター，９月から加えて川口市のどうぶつの総合病院でお世話になっている．まだ専門的医療のスタートラインに立ったばかりではあるが，全く異なる環境での経験を少しでも還元できれば幸いである．これからの抱負としては，専門的医療は１人でできるものではなく，同等の専門家がチームとなって初めて質の高いサービスが生まれる．そのような大きなチームの一員として働くことができれば本望である．そして，今後自分の後進となる方々にはできるだけ高くまで登り詰めてほしい．この２つができる環境整備は私にとって今後の大きな楽しみである．

12　最　後　に

専門医という立場は，ほんの７～８年前の自分には完全な絵空事だった．幸運な出会いや温かいご支援が幾重にも積み重なり，周りの方々にここまで連れてきていただいた．これからの自分のキャリアの中でもっと大きな「絵空事」を実現できることを願っている．

夢や目標が高ければ高いほど，それを実現するために越えなければならない山が高すぎて，そこを登るなんて想像できなくなる．しかし，「大きな山」なんてものは元々は存在せず，実際にあるのは小さな山の連続なんだと教わったことがある．周囲の温かい支えや人の縁が重なりながら一つ一つ目の前の山を越えていくと，いつか気づいたら随分遠くまで進んでいるので，大切なのは小さな丘でも山でも登ってみることだそうだ．道半ばの私が言うのもおこがましいが，こんないい加減な自分でもここまで来られたのだからきっと皆様にもできるはずだと信じている．

最後に，日米を何度も往復しながら長くて厳しい海外生活をあらゆる面で支えてくれた妻をはじめ，我が家に来てくれて毎日笑いを提供してくれる犬の Tippy と猫の風太，長年変わらず見守ってくれる両親，我がことのように応援してくださっている義両親，そして温かく支えていただいた多くの方々に心から感謝したい．